

神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書

Report on the Results of “Systematization of Nonwritten Cultural Materials
for the Study of Human Societies” Kanagawa University 21st Century COE Program

地域情報学の構築

——新しい知のイノベーションへの道——

Development of Area Informatics
—The Way to Innovation of Knowledge—

神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center

地域統合情報発信がこのたびの21世紀COEプログラムにおけるわが班の役割である。しかしこの言葉は、地域・統合・情報・発信、四つの語句の組み合わせ次第でいくつもの説明が成り立つ。プログラム当初の企画では、図像、民具、身体技法、景観を研究対象とする他班の成果、ノウハウに基づき、それらを一地域で統合的に重ね合わせて発信、公開するシステムを開発することであった。大きく、IT技術の利用、実験的博物館展示、またそれに携わるシニア・キュレーターの育成プログラムがその目標として掲げられたが、後二者は発展的に実験展示班に委ねられることになった。

そこで、わが班では、地域を福島県南会津郡只見町に定め、インターネット・エコミュージアムというシステムで只見町の地域情報を統合的に発信する試みを模索してきた。いわば語順が、地域情報・統合発信となった。只見町を選んだわけは、地域住民の協力はもとより15年間に及ぶ町史編纂事業が終了し、各種文書類、民具、写真をはじめとした映像資料から地質、動・植物などの自然誌資料までが網羅的に記録化・整理され、それらのおおよその関係性・体系性が20冊の町史本編・文化財調査報告書を参照することにより見通すことができ、また、住民自らが整理した約8000点の民具カードにはそれらにかかわる直接的・間接的な情報が山のようにつめ込まれていたからである。情報は英語では、インフォメーションとインテリジェンスの両様に訳すことができるが、個別的な民具のデータベース化、そこから読み取れるさまざまな地域情報をクロスさせコンテンツ化して只見町という山村地域の構造的な浮き上がりさせることができると考えた。ささやかな試みといえるが、日本全国の市町村誌関係資料のデータベース化、そのコンテンツ化とその利活用の方向性の一例を示しえたと思っている。なお、学問としての地域情報学については提唱者である京都大学東南アジア研究所の柴山守先生の諸論文を参考にさせていただきたい。ここでは、一つの地域社会のさまざまな情報をクロスさせて何が言えるのかという意味で用いた。

また、このような試みが少子高齢化等でムラの存続そのものに悩む、山村地域の人々がインターネットで世界につながり、改めて地域を見直し、地域振興を図る弾みの一助、エコミュージアム、エコツーリズムの一環に連なれたらと願う。このプログラムを全面的に支援してくれた只見町長はじめ住民の皆様にこの場を借りて改めて謝意を表したい。

なお、わが班の5年間の成果は、2008年2月23日開催の国際シンポジウム「地域研究と情報学の連携—インターネット・エコミュージアムの可能性—」のセッション報告とこの最終報告書『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—』でまとめとするが、現在、試験配信中の只見町インターネット・エコミュージアム (http://www.himoji.jp/tadami_item/) のウェブ上での今後の展開・更新についてはさまざまな形で只見町と協力しながら可能性から実現、より完成された形でユビキタス・ネット社会の好例となることを目指していく。皆様の、忌憚のないご意見をお待ちするものである。

2008年2月20日

4班 地域統合情報発信班 代表
佐野 賢治